

・・・雨でも休まず、238回、239回・・・

「小原本陣の森・若柳嵐山の森」

- 定例活動1 6月 1日(第一日曜日): 小原本陣の森、担い手育成
参加費400円、主食持参
- 協働活動 6月 8日(第二日曜日): 孫山景観周遊路開削、相模原市と協働
参加費無料、弁当持参
- 定例活動2 6月15日(第三日曜日): 若柳嵐山の森・里山交流、多様な森林活動
参加費400円、主食持参、体験学校開催
- 通常総会 定例活動終了後: 6月15日・16時から、相模湖交流センター2F

- ・初参加: 9時15分までにJR相模湖駅前集合、ベテランは各自森へ
- ・服装: 汚れても良い服装、着替え、長袖、滑らない足元
- ・持参品: 成るべく皮製手袋、万一の怪我に備えて保険証、自分のお椀と箸
- ・注意: 危機管理・救急体制・気配り、会として可能な限りの安全体制を敷いていますが事故・怪我は「自己責任」です。

NPO 活動、自治体との協働広がる

NPO 法施行から10年を経過しNPO 法人と自治体の協働事業を行う動きが広がっている。

NPO が事業提案し自治体から委託を受ける形態が主です。狙いは、「住民の要望に沿った行政サービス」で住民と行政の接近現象、これは民主主義の進歩の形態と思います。

協働事業は、NPO と行政が共通の目的を果たすため、“対等な立場”でアイデアや労力を提供しあうのが原則です。ここで、“対等な立場”を強調しなければならないのが問題ですが、歓迎できるシステムです。当会会員の一人が相模原市での仕組みづくりに協力しています。この仕組みは自治体にとっては外注費削減につながる側面があります。NPO に取っては活動費の捻出になりますが、協働とは名ばかりで下請け扱いにされることもあり、本来の目的から外れた活動にならないよう双方、気を付けねばなりません。



ボランティア活動は、いろんな活動があっても良いのですが森林は空気・水・CO2 問題など公益性が強いから、森林に特化した法人としての当会活動は、行政と協働してこそ効果的な成果が出せます。

経路工事 6 名、中里山境界線表示 2 名で行った。今月は境界線表示に絞って報告する。

3 月末に中里山の協力協約の為に県立会いの測量を実施した。その際、測量杭の設置と共に立ち木に目印の白テープをつけておいた。本日は中里山の区域が遠目でも判るようにするため、黄色テープを境界線に張る作業を行った。これは石井山作業の反省に基づいたもので、参加者全員が作業範囲を明確に認識出来るようにするものだ。やり残しの発生や範囲認識・指示待ち等の能率低下の発生防止に重要だからである。経路作業と同時に境界を明示する事で、作業場所へのアクセスの適正な経路を見通すためでもあり、また、境界を正確に掌握して、整備作業の概要を検討するためである。中里山面積は約 2 ha で形状は異形扇状で周長は約 7 0 0 m と推定される。

周辺境界表示作業は石村・川田が担当し、中里山下の沢から時計回りに登ることにした。急斜面の藪の中で立ち木の目印テープを探しながら、境界線を辿り黄色テープを張った。テープの邪魔になるボサを伐りながらの作業なので時間が掛かり、中里山上部境界線に辿り着いたときは、昼になっていた。一度基地に戻り昼食をした。経路チームも基地に戻ってきており工事は順調に進んでいるようだ。

午後、石村さんは甲州古道・道標設置のため不在で一人作業をする事になった。午前中の地点へのアクセスチェックのため作業経路を辿ったのだが黄色テープになかなか行き着かず、見つけた時はホットした。境界テープの有効性を実感した。

一人作業は非常に能率が悪い。まずテープ玉を置いて次の目印を探し、見つけたら元に戻り藪ボサを除去しながらテープを張る。この作業の繰り返しである。最後部分で測量点が見つからず迷い、急斜面の沢を滑り降りる事になってしまった。中里山は、石井山より急斜面なので作業だけでなく往復路についても注意が必要だ。予定時間を過ぎたので後日作業とした。

中里山の境界表示はほぼ完了、全体像がかなり把握できた。経路づくりは中里山上部境界線辺りまで必要である。

関連報告 : 孫山景観コース開削 : ルート調査

小原宿活性化推進会議・孫山景観プロジェクト

5月11日 (第二日曜日) 報告 : 石村 黄仁

霧雨の“小原の郷”に5人(永井、中里、丸茂、川田、石村)が集まった。嬉しいのは、山林地主の永楽山・永井さん、中里山・中里さんが参加してくれたこと。

孫山景観コースの整備に理解を示して下さる地主さんの今回の参加は、ルート開削の道筋を付けたこととなる。



小原集落の森入り口の沢を渡って7年前に整備した市有林・清水山の斜面は、新緑に映えて美しく、前々回に張ったルートテープに沿って尾根筋までのぼり、3月に見つけた“天明の祠(1781~1788)”からポイントポイントをチェックしながら、軟傾斜を孫山まで辿った。250年もの前の祖先の足跡を知って森への想いは一層、強くなった。



報告2：若柳嵐山の森：5月18日

(第三日曜日)

「みんな伊達(ダテ)には生きていない」

報告 伊藤小夜子

新緑の五月、お花畑でフト、上を見上げたら圧巻！三本の大きな桐にピンク紫の花が満開では無いか！？ホント遠くに行かずとも、この嵐山はいろんな彩を見せてくれる。

参加：学生連合 NOVA・12名、望星高校14名、初参加3名、一般16名、計45名。今日も初参加者のチョッと緊張した中にユーモアある挨拶から始まった。望星高校の榎木先生(生活指導)は、「今日は生徒についてきた。自分も学びたい」。本日、全員男子生徒の参加。

望星の森では、宮村先生の声がアチコチで響く。栃の樹の周りの蔓切りなどの整備。肩上がりの急傾斜地なので滑りやすい。高校生たちは、現代っ子らしい会話を交わしながら作業は進む。樹は4m位まで伸びているものもあった。一方、NOVA・新一年生は、内野インストラクターの自然観察会に参加。午前・嵐山の植生、午後・巨木の森の植生観察。ベテランの加藤学生、滝澤学生は、それぞれ森林班、木工班に付く。

私も午後、巨木の森・植生観察に参加したが一つ一つに草花や、それに付いている虫や蝶などから豊富な知識、物語、進化：生き物の工夫、環境との関連など、時には“ユーモアを混ぜて解説してくれる・内野ワールド”に魅了されました。この日、特に印象に残った言葉は「伊達に生きていない！」というセリフ！どんな植物も動物も生きている限り、何等かの工夫をしつつ進化して、ここまで来ている生き残り作戦。そして花が受粉のためにどんな花を選ぶか、虫が選ぶか。



この日、花に付いていた虫、顔の長いオトシブミヤ、ゾウムシの一種

が観察者の手の平の上でみんな、死んだ振りして“息を止めている”のが愉快でした。こんな多彩な花・虫 etc ワールドを知って沢山の人が森の関心を持ってくれたらいいなあ～と。

「沢山の植物が見れた。虫や亜植物の特徴や習性など自分で見て・触れると、とても知識になってよかった。」少数精鋭で森林整備班、お花畑班の草抜き、工房班は全幅堰（水量調査に使う）の設計・製作と言う新しい仕事に取り組んでいました。お昼は森で採集した若葉の何でもありの天麩羅でカマドの周りも盛り上がっていた。

報告 3：間伐材を生かした：森づくり・ものづくりコンテスト

報告：石村

相模湖商工会と共催で「森林再生事業促進実行委員会」を立ち上げ、昨年10月から12月に掛けて、間伐材活用部門、ランドスケープ部門に分け、全国に向けて募集した。森林は全ての人々との協働だから、子どもに知恵も借りようと子ども部門も設置した。今回の試みは、このコンテストを通じ荒廃の進む森林保全・再生活動を広報し、森林に関心を持ってもらおうと言う事である。木が売れないから森林放置・・・と言う社会問題に対する解決の糸口を探りたいとの意図だ。

初めての試みで応募を危惧したのだが、和歌山や宮城など全国から大人161、子ども100点余りもの応募の多さに驚かされた。優秀賞、佳作など15点を決め、4月29日(みどりの日・昭和の日)、表彰式を新緑の陽差しの差し込む相模湖交流センター・展示室で開いた。親子連れの和気藹々の表彰式は、「楽しくて立ち去りがたい」の成果を収めて大成功に終わった。



このコンテストには、小田原健氏（家具デザイナー）、内藤廣氏（建築家）白砂伸夫氏（ランドスケープアーキテクト）など一流の審査員のご協力を得たのだが、この成功の最大の理由は、事務局を努めた淵上美紀子さんと、それを支えた丸茂喬会員（ランドスケープ出版）に負うところによる。また、神奈川県、相模原市の後援を得ることが出来たのも、今後が楽しみな成果である。

報告 4：自治体との協働拡がる：相模原市協働事業提案

地方自治体では、行政と市民・市民団体との協働事業が急速に広がっている。昨年07年度は、

67自治体で3800件を越えた。1自治体当り約60件の勢いだ。相模原市も数年前から、この制度を研究しており21年度から協働事業を開始すると通知があった。(表紙のグラフ)



当会の提案のテーマは「水源の森林保全・再生」であり副題として、「荒廃の水源の森：小原本陣の森整備」とした。「小原本陣の森」は、小規模・多数所有者からなる森林である。当会は3年前から整備に入っているが、地主さん自らも整備に入るようになっており既に、4ヶ所・80haの内、25ha程度の整備が終わっている。更に、新たに4人の所有者から整備の申し入れを受けている。地域の私有林所有者と森林NPOが協働する森林整備を相模原市に応援して欲しいと言うのが当会の提案理由である。もしここ「小原本陣の森」で成功すれば、点(地区)から面(地域、広域相模原市・神奈川県)へと広がる実践に根ざした政策提言ができるようになるだろう。

わが国の私有林は、森林がお金にならないから放置・荒廃と言う事だから、これに経済性をもたせる事が出来るなら地主さんが森林に帰ってくるだろうと言う事で「生産林・国内認証SGECの森づくり」を盛り込んだ。特に小規模・多人数の意思を纏める事と谷が深く地形が複雑で小仏砂礫層の崩れやすい地層からなっている最悪の条件で、果たして生産林に出来るかどうか。“国際FSC認証林・若柳嵐山の森”以上に難しい課題だ。

小原宿活性化推進会議：17日(第三土曜日)

報告：石村

相模原市が支援する「小原宿活性化推進会議」は、相模湖町のオピニオンリーダー14名を集めて小原集會場で平成20年度予算案を検討した。推進会議は、六つのプロジェクト(1・甲州古道復活、2・孫山景観ルート開削、3・町並み保存、4・小原の郷活用、5・古民家保存、6・もてなし)から成り、当会は1、2、3、のプロジェクトに参加している。

森林現場に学べと、実践活動を重視して森林の公益性と多様性を主張し続けてきた当会には、強い想いと知識実践の会員が、多数いるから良い結果に繋がると思う。森林地帯の過疎化が進む中で相模原市・相模湖町の立地条件は、絶好の場所にある。ここで活性化推進会議を成功すれば、全国の森林再生モデルとなれる。

旧津久井郡四町(藤野、相模湖、津久井、城山)を合併して森林率が58%になった森林地帯の活性化の為に相模原市は、相模湖町・小原地区に思い切った挺入れをしようとしている。相模原市は、22年度目標に政令指定都市を計画しているが、黙々とひたむきに活動を継続して来たとは言え、大都市と森林が隣接した相模原市で、森林に特化したNPOが地域の人々と協働してこんなプロジェクトの一員に受け入れて頂いている事は幸運以外の何ものでもない。

学生連合 Forest Nova では、5月30日に新たなメンバーを募集すべくオリエンテーションを行います。

日時：5月30日（金）19：00～21：00（開場18：00、入退場自由）

場所：ソレイユはしもと

JR 橋本駅北口、SATY 百貨店 6 階

参加費：無料

参加対象：木や自然が好きな学生

環境問題や森林問題に興味がある学生

このオリエンテーションでは世界、日本の森の現状を講義形式でパワーポイントなどを使って私たちに説明します。そして、その現状を打破すべく活動する私たちの活動内容を「森をつくる」「森を知る」「森をつなぐ」「森をいかす」という Forest Nova の活動方針ごとにブースをたてて説明、最後に Forest Nova への参加方法を紹介して新たなメンバー募集をします。

また、多くのメンバーを活動に巻き込む以外にも、同じように森で活動している学生団体に Forest Nova のことを知ってもらい、交流を深めたいとも思います。

今回のオリエンテーションは、講義やブースといった座学形式で行います。さらに、相模湖に近い大学に通う学生をメインに広報し、今後の嵐山・小原本陣での活動を共に出来る学生を引き入れようとしています。

しかし、次回以降では Forest Nova の活動範囲を広げた上で、相模湖周辺だけでなく様々な地域でオリエンテーションを行う予定です。また、今回のような座学形式だけでなく、オリエンテーションを行う地域特有の森に赴き、その森の個性を活かしたオリエンテーションを行うことによって、単に新たなメンバーを募るだけでなく、地域の学生や様々な人々にその地域の森の良さに気付いてもらったり、森の重要性を感じてもらったりできるようなものにしたいと考えています。

Forest Nova は、実際の整備も行い現場を知った上で今の森の姿、森の重要性、森との付き合い方を社会へ発信していく団体でありたいと考えているからです。

オリエンテーションについて、または学生連合 Forest Nova という団体そのものについての質問などありましたら下記のアドレスまでお問い合わせください。

< 問い合わせ先 >

forestnova_info@yahoo.co.jp

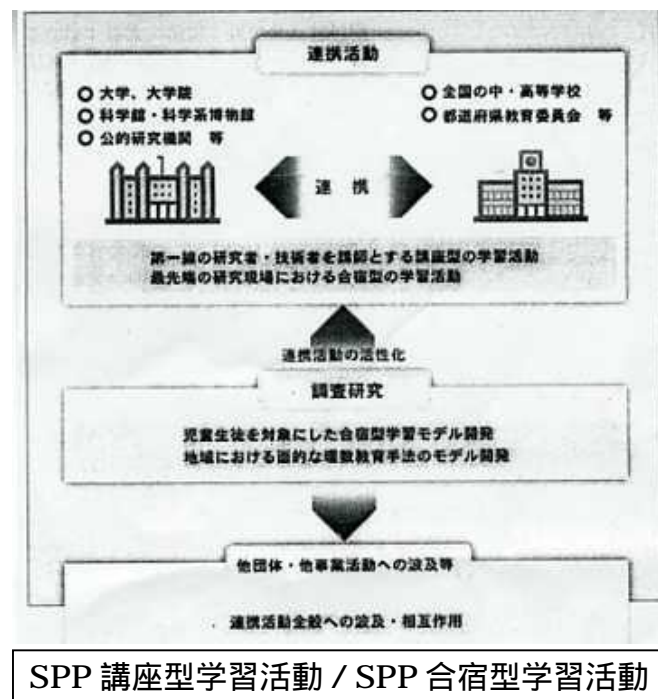
「学生連合 Forest Nova 」宛てのメールアドレスになります。

望星の森指導者の宮村教諭が、高校の通信課程でインターネットによる森林講座を、当会と組んで開発したいと文部科学省の「サイエンス・パートナーシップ・プロジェクト」(SPP) に応募する事を計画している。

学校上層部に申請して許可が下り、責任者の若林副校長（同行：榎木生活指導主任、佐藤情報管理室長）が、相談に石村事務所のお見えになった。

宮村教諭がこの森に出入りするようになって足掛け5年になるが、扱いの難しい年頃の高校生を毎月10人以上も連れてくる。しかも40度急傾斜の崩壊地に根を張る栃の木を植えて、そこを“望星の森”と名付けてトウトウやり挙げてしまった。ほとほと感心していたのだが今度は、上記SPPに挑戦すると言う、全く途方も無い熱血・青年教師だ。

この事業は文部科学省の管轄で、決済は未だだが、当会活動を支える中心会員は10人ばかりいて誰をとっても皆、呆れるばかりに熱心・有能で今回も当会が望星高校と組んでSPPを完成させれば、これもまた、当会活動に新しい歴史を刻むことになる。



甲州古道：道標設置のこと

齊藤会員がリーダーとなって進めている“甲州古道プロジェクト”は、「小原宿活性化推進会議」から10本の道標を受注した。

これまで、交渉の難しい私有地での設置は、避けてきたが今回受注の内、「与瀬宿～間の宿」の3本の設置場所が、どうしても見つからず困ってしまった。

そこで断られても、ダメ・モトを決め込んで街道筋で尤も目立つお宅に「ごめん下さい、お願いがあります」と飛び込んだ。ところが案に反して「ドウゾドウゾ、好きな場所にどうぞ。皆さんの事は良く知ってますよ」であった。古道活動は、この5年間コツコツと積み上げて毎日新聞や神奈川新聞などが良く取り上げてくれているから、当会活

動の知名度と信用が根ついたので、ドウゾドウゾの成果となっているのを殊の外、嬉しく思った。
その内のお一人、「間の宿：馬引継ぎ宿」の歴史を持つ山下さんは、「面白いものがあるよ」と裏庭の江戸時代の祠や水路トンネルを見せてくれただけでなく、何かの時に使おうと取っていた十分に乾燥した「柘の木・半割り大丸太」を持って行かないかと言う。それなら、「古道：間の宿・馬宿」の道しるべを作りましょうと喜んで頂いた。地域の方々に受け入れられている事を確認できた嬉しい今回の道標設置事業であった。

* 活動を開始して5年目の今、古道復活は行政とも協働する事業になっている。その積み重ねの故につい最近、相模原市・文化財保護課とも連絡が付いて本格的な調査に繋がりがかかっている。甲州古道の歴史掘り起こしは、地域財産の再開発であり地域活性化のキーポイントである。こんな事から、歴史学（郷土史、日本史、世界史）の重要性を改めて考えている。そしてここ津久井は柳田國男の民俗学の発祥の地。

会員各位 第六回：通常総会

・ 第六期：通常総会を以下の要領で行いますので、ご参加下さい。

- ・ 日時 平成20年6月15日(第三日曜日)、：定例活動（若柳嵐山の森）終了後
午後16時～17時15分
- ・ 場所 相模湖交流センター 2F 研修室
- ・ 内容 1号議案 第五期事業報告・収支決算
2号議案 第六期事業計画・収支予算
3号議案 その他

総会終了後・・・会員交流会：相模湖交流センター内、ル・ポン、参加費 1000円

活動のモットー：急がず、楽しく、無理せず、休まず、ポチポチと・・・
そして、沢山の参加で森は良くなる。

名 称：特定法人非営利活動法人緑のダム北相模：若柳嵐山の森、小原本陣の森

事務局：154-0023 東京都世田谷区若林3-35-9

発行人：NPO法人緑のダム北相模・運営委員会
T&F 03-3411-1636

H P：http://midorinodam.jp

E-mail：info@midorinodam.jp

協働団体：神奈川県（政策部土地水資源対策課、環境農政部森林課、県央地域総合センター森林部）セブーンイレブンみどりの基金、（財）オイスカ
小原宿活性化推進会議、

支援団体：WWF ジャパン、イオン財団、神奈川県建具協同組合、東急コミュニティ